

このところ、われわれが取り組んでいるのは、蕪村が芭蕉の「奥の細道」という文章をどんな考えで画巻にしたかを探ろうというものでしたが、画人であり俳諧師であった蕪村は、それだけでも多面的ですが、その絵、句自体がそれぞれに裏と奥行きを隠した表現体で、そんな多面体の表現を次々とこなした蕪村と親しくなるためには、こちらも出来るかぎり、多面的に向かい合わねば、と考えた次第。

これからもしばらく。蕪村の「奥の細道」を他の仕事と同時に眺めるという方法を展開して行こうと思っています。

「夜色楼台図」は、胡粉を全体に下塗りした和紙に墨で描き、家の窓などに僅かばかりの代謝絵具を載せた、横長27・3×129・3センチの絵巻に近い形式で、右端に「夜色楼台雪萬家 謝寅書」とあります。朱印は二つ。「謝長康印」と「春星」と読めます。「謝寅」という号は晩年1778年、六十三歳ごろから使い始めた号です。

「夜色楼台雪萬家」の七言は、蕪村自作ではなく、同時代の萬庵原資1683〜1759の「江陵集」から抜き出したもの。図と詩の配置は、文字と図の部分は別々に並べられ、これは、平安時代発祥の絵巻物の形式です。室町時代以来発展してきた図のなかに賛を書き込み、画賛一体とする方式を否定しているように見えます。しかし、そんな技法上のことなど丸で気にしてられない、なにかひと目で迫ってくる画情（ボクの造語です。絵が醸し出す情感）に惹きつけられます。

賛のような画題のような七言（七文字）のほかに、この絵から蕪村の自作の句のどんなのが浮かんでくるか。

とりあえず、二つ挙げてみましょう。

宿かさぬほかげ火影や雪の家つづき

冬ごもり心の奥のよしの山

対立するイメージの句ですが、この絵はこの相反意する二句のイメージのどちらも隠し持っているところに、惹きつけて止まないものがあるようです。そんなことを、絵を観ながら考え、「奥の細道」へ入って行こうと思います。